
朝チュンから始まる物語（仮）

鍵屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝チュンから始まる物語（仮）

【著者名】

Z2667S

鍵屋

【あらすじ】

朝日が覚めました。ベッドにはあたしの他に男がいました。ふたり。
あれ？ そういう馬鹿馬鹿しい話。

田が醒めたら自分が裸で、身体には情事の後のだるさがあつて、隣に男が寝てる なんてのは、物語の中だけの話だと思つてた。

「ああ、田が醒めたんだね。身体の調子は大丈夫?」

右隣の男が、そう甘つたるい笑みを向けて言えば、「のじ乾いてねえか?」

左隣の男が、気遣うよつた調子で言つ。

はつきつ言おひ、何がなんだか、さつぱり理解出来ない!

記憶違いでなければ、昨日あたしは会社帰りに行きつけのバーに行つた。

駆け付け三杯。は冗談だけど、その勢いでバー・テンのおにこちゃんにカクテルを注文。それもアルコール度数の低い女の子が飲むような甘いそれじゃなくて、がつたり来るそれ。

それを一気に呑み干して、その後はだらだらバー・ポンをあおる。あおる。あおる。たまにスコシチヤジンも。

とにかく、呑んで、呑んで、呑んで。やつとほろ酔いになつたそこに、店のマスターが特製のカクテルをつくってくれた。

真つ赤な血みみたいな色のその中で、死体のように沈むサクランボ。刺してある楊枝ごと救出して口の中に放り込み、甘酸っぱいそれを口の中へいじめながらカクテルを堪能。

ああ、おいしかつたわ。とっても。今思い出して喉がなるほど。

そこに声をかけて来たのが、見知らぬ男。右隣の男とも左隣の男とも違うことは断言できる。

だつて、両脇の男は思わず惚れちゃうような美男だけど、その男は好みを形にしたような平凡そのものの男。人込みに紛れたら絶対に見つけられなさそうな。

平凡こそが正義！

それが信念。だつて、平凡であれば恨みをかうことも妬まれたりひがまれたりすることも少ないもの。

更に呑みながらその人と意氣投合。

それでお持ち帰りされちゃつたところまでは記憶がある。美味しいただかれちゃつたところまでは覚えてる。

それがなんで、どうして！

こんな美形な男共になつてるのよ！

元左隣の男があたしが現実逃避してゐる間に水を持ってきてくれて、元右隣の男が甲斐甲斐しく瑞々しい桃を剥いてくれた。

冷たい水は美味しかつたし、桃も甘すぎずあたしの好みだつた。そのお陰か体力と氣力が戻つたあたしは、改めて現実を直視する。

元右隣の男はその一拳一動が洗練された、少し長めの髪と仮面のようになつた甘つたるい笑みがアイドルを彷彿とさせる男。対する元左隣の男は男らしいや偉丈夫と表現するのがしつくりくる、短い髪を立たせた精悍さ溢れる男。

うん、やっぱり覚えがない。

「……ねえ、あなたたち誰なの？」

十代の小娘ではないあたしは比較的冷静に、でも美男に警戒しつ訊ねる。

男共は少し困つたように顔を見合せたかと思つと、それぞれあたしの手を取る。

「わたしたちには名と呼べるものがないのだと、昨夜お話しした通りです」

「数多もの意識の集合体である俺らを、貴女は昨夜は愛しい人と呼んだ。だからこれからもそれで構わない」

手の甲に軽いキスを落としながら男共がいう。

確かに、理想そのものの平凡男は「名がない」といい、あたしはその男のことを「愛しい人^{ターリン}」と呼んだわ。呼んだけどもっ！」

「それはあなたたちのことじゃないはずよ。あたしを騙そいつてそうはいかないわ。

あの人はどう？」

そうだ。

なんでこの男共が知ってるのかは謎だけど、それよりあの平凡男の行方が気になる。

一瞬嫌な光景が脳裏をよぎつたけど、二十代も半ばを過ぎたあたしをどうこうしたところでメリットはそういうだろ？

街角にいるちょっと可愛い子程度の顔と、肉付きの悪い骨と皮だけみたいな身体。あまり異性に好まれる体系じゃないことは自覚してる。告白した男の半数はあたしの身体を残念そうにちらりと見たあと、女として見れそうにないと告げてくれたほどだ。性格や関係的なものじゃないのは明らかだった。クソ喰らえ！

因みに残りの半数は好きな人がいるとか、そんな感じの遠まわしの返事だった。

「あれはわたしたちですよ」

「貴女と交わることで力を得、こうして分離することが叶った」

「未だ集合体であるわたしたちには名はありませんが、陰と陽、光と闇、聖と邪といった具合に分かれることができたのです」

「なにそれ？ 余計意味わかんないんだけど…」

「わたしたちは、『こ』ではない世界の神々でした」

「神は人には計り知れない力があるが、万能ではない。」

それゆえに、俺らは神の力をより行き渡らせるために幾つにもわかれだ。そのための弊害もあつた」

美形ふたりが説明してくれた内容をまとめると、『この世界』とい

しい。

ひとつ。幾つもの神にわかれたためにより手は行き届くようにはなつたものの弱点も多くなつたのだと。

ふたつ。世界は幾つもあって、彼らは違う世界の神から急襲を受けたのだと。で、ひとつめの理由から歯も立たず、消滅を免れるためにひとつになつていつた。

みつ。最初のふたり つまり、今の状態まで戻つたところでなんとか退けることは叶つたけれど力を消耗しすぎて神としてあれなくなつたのだと。

よつ。力を取り戻すために眠りについたが、気がついた時にはひとりになつていて、自力では元に戻れない状況になつていたと。それがあたしとバーで出会つた平凡男の姿だという。

「……わかつたわ。あたしにはさっぱり理解出来ないってことが

この人たち頭おかしいんじゃないの。顔はいいのにもつたいない。正直そう思ったのだけど、男共は絶対の混じつたあたしの言葉を見事にスルーしたらしい。

「それで何も問題ありません。ただわたしたちの側にいて、わたしたちの核であるその御靈とともに共にあつてくれればよいのです」

「この世界風に言つと、神子として仕えるとでも表すのか。」

俺らを想い、俺らを受け止めろ」

えつと。つまつぢうこつことかしら？

頭が考える」とを拒否してゐるのか、言葉は見事に右から左に流れ出た。

男共は見事な笑みを浮かべると、それぞれあたしの手を取り手のひらにキスをする。

「わたしたちの乙女」

「どうか俺らと共に歩む道を選んでくれ

その懇願するような男共の声に、あたしは拒むことが出来なかつた。

結論を言つと、その後結果として朝っぱらから再びイタシテしました。

んで、気が付くと美形が増えていた。

説明を求めたところ、手順を踏んでこの美形共とスルると増ええるらしい。

わかつたこと、いつつめ。

私の魂はこの自称神な美形共の力の核であるらしい。だから側にいるだけで力を得られ、イタすことで一時的にだけど本来の力を取り戻せるらしい。

その結果、美形が 神が増える。

もう笑うしかないね。あつははー。
はあ。

(後書き)

朝チユンが書きたかつただけで、続きません。続きが書きたい方がいたら（まあ、いなーと思いますが）ご自由にお書きください。公開するときに連絡くれたなら、画面の前でにぎやか出来るので、大変歓びます。

毎度の事ながら、なんで「神」なんでしょうな。どうしてこうなつた、です。

それはさておき。ほとんど出てこなかつたけど一応は考えた設定としては、

「あたし」は二十代後半。お酒に半端なく強い。二次成長の前で成長をやめたような肉付きのなさ。トライアウマがあつて「平凡最高、世間に埋没最高」と、平凡が好み。成長が止まつたのは「核」のせいで、イタすことで女らしくなります。ひと月後くらいにA AカップからAカップ（または、Bカップ）になつたと、歓ぶことでしょう。

「神」は……なんもあり? 最初のふたりは懲懲系と武骨系。単に趣味です。

では。またお会いできるることを願つて。

2011.04.06.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2667s/>

朝チョンから始まる物語（仮）

2011年4月28日07時58分発行